

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03127

研究課題名(和文) 朝鮮北部地域社会史研究 19～20世紀初戸籍史料からの接近

研究課題名(英文) A Social History of the Northern Region of Korea: from the 19th to the Early 20th Century

研究代表者

山内 民博 (Yamauchi, Tamihiro)

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：40263991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀から20世紀初の朝鮮北部地域に焦点をあてて戸籍を分析し、同地域の社会編成および家族・親族結合の特質と変化を検討した。まず、戸籍の記載内容において、これまで主たる研究対象であった南部地域とは異なる、北部地域に特有の特徴と変化がみられることを明らかにした。また、そうした特徴・変化に対応した社会秩序・親族結合についての事例研究をおこない、北部地域における柔軟な社会構造の一端を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、戸籍を中心に19世紀から20世紀初の朝鮮北部地域の社会編成・社会秩序の解明を試みたもので、これまで南部地域に重点を置いてきた朝鮮戸籍史研究を進展させる基礎的な成果である。より広くは、従来の南部地域をモデルに構築されてきた朝鮮史像の修正を提起し、韓国・朝鮮に対する多様で豊かな認識を提供するものであり、変動期東アジアの多様な姿を把握するための重要な成果となろう。

研究成果の概要(英文)：This study analysed Korean family registers focusing on the northern region from the 19th to the early 20th century, and examined the characteristics and changes in social organisation in the region. As a result, it was found that the contents of family registers had characteristics specific to the northern regions, which differed from those of the southern regions. It was also found that their flexible social structure corresponds to the characteristics of their family registers.

研究分野：韓国・朝鮮史

キーワード：韓国史 朝鮮史 家族史 身分 社会史 アジア史

1. 研究開始当初の背景

朝鮮時代の地域社会史（郷村社会史）研究は半島中部以南、とくに慶尚道など南部地域を主たる対象に進められてきた。士族支配秩序の成立と動揺、身分制の変動など、朝鮮時代の歴史像の多くは南部地域の事例研究によっている。こうした南部偏重は何よりも南部地域に関わる史料が豊富なためなのであるが、朝鮮社会の歴史像を多様な視点から再構築していく上では、北部をはじめとする非南部地域に関する研究を進展させる必要がある。

ところで、朝鮮の北部地域のかなりは高麗時代には領域外にあり、領域内の地域にしても北界・東界（あわせて両界）と称され、中部以南にみられる道を単位とした地域（慶尚道など五道）とは区別されていた。朝鮮時代に入ると、領域の拡大が進んで現在の国境に近づき、平安道・咸鏡道という道が置かれた。この地域も一元的な統治体制の下に組みこまれたのであるが、領域内には女真人が少なからず居住し、辺境・境界の性格を色濃くもちつづけた。さらに、19世紀後半以降になると、この地域から多数の住民が境界を越えて中国・ロシア領に移住するなど、半島の中で独特の容貌を示す地域である。

以上のような経緯もあり、朝鮮の対外関係史、朝鮮-女真関係史、近代移民史の分野では、この地域に関する研究が蓄積されてきているが、北部地域社会自体に関しては史料の乏しさから研究がさほど進んでいない状況であり、村落・家族・社会編成など、検討すべき課題は多く残されていた。そこで、本研究では19世紀中葉以降のものが残る北部地域の戸籍に注目することにした。

2. 研究の目的

本研究課題「朝鮮北部地域社会史研究—19～20世紀初戸籍史料からの接近—」は、19世紀から20世紀初めの朝鮮北部地域に焦点をあてて戸籍を分析し、同地域の社会編成および家族親族結合の特質と変化を明らかにすることを目的とした。

本研究の具体的課題は、つぎの3点であった。

第一に研究の基礎となる朝鮮北部地域戸籍の史料としての性格を究明すること、第二に戸籍の記載内容を中心に社会の編成および秩序の特徴を明らかにすること、第三に戸籍の記載から家族構造および親族の特徴を明らかにすることであった。

こうした北部地域社会に関する研究は、これまでの南部地域をモデルとした朝鮮時代史像を再検討する契機となるとともに、辺境・境界という性格をもつほかの地域（中国東北、琉球など）との比較をつうじて、19世紀から20世紀にかけての変動期東アジアの多様な姿を把握するための基礎的成果となることが期待されるものであった。

3. 研究の方法

(1) 朝鮮北部地域戸籍の基礎的研究

現存する1896年より前の朝鮮戸籍（旧式戸籍）のうち北部地域のものとしては平安道中和府の1852年の戸籍1冊が残り、1896年以後の北部地域の新式戸籍は20数冊の現存が確認されている。1852年の中和府戸籍および新式戸籍のうち選択した冊の整理・分析が本研究の基礎的な

作業であった。

既往の研究のなかで、南部地域を中心に旧式戸籍・新式戸籍それぞれの戸籍としての性格や戸口把握の特徴が検討されてきている。ここではそうした南部地域の戸籍と比較して、北部地域の戸籍がどのような特徴をもつのか、様式・記載内容などの検討をおこなう基礎的研究をまずおこなった。その際には、戸籍だけでなく関連する諸史料（地誌・官庁記録・日記・裁判史料など）も利用して、漏籍や戸の設定方法など戸口把握の特質に接近した。

(2) 朝鮮北部地域社会の社会編成・秩序の検討

この時期の戸籍は形式の上では郡一面（坊）一里一統一戸という構成をとっており、戸主には社会的地位（身分）と関係する職役（旧式戸籍）・職業（新式戸籍）が記載されている。また、女姓戸主や戸主の妻には社会的地位に応じた姓氏の表記法の差異がみられる。こうした諸要素の分析をつうじて、郡から村落レベルに至る社会編成の特徴を検討するとともに、戸籍以外の史料も活用して社会秩序の様相を解明を試みた。

(3) 家族・親族の特徴

戸籍には漏籍の問題がつきまとうものの、一定程度は記載内容から戸ないし家族の復元、親族関係の復元が可能である。前述したように、すでに検討した咸鏡南道端川郡戸籍の場合、中部以南にくらべ戸あたり口数が非常に多いという特徴があり、これは戸内の同居親族の多さによっていた。こうした特徴がほかの北部地域にもみられるのかという点など、家族構成・年齢・祖先情報といった事項の分析をおこない、また戸籍以外の文献史料からの情報を整理した。

4. 研究成果

本研究の成果を以下の4つの点にしぼって述べたい。

(1) 19世紀中葉朝鮮北部地域戸籍の特徴

1896年より前の朝鮮戸籍（旧式戸籍）のうち唯一北部地域の現存する戸籍である『平安道中和府壬子式年戸籍』（1852年、東北大学附属図書館所蔵、以下『中和府戸籍』と略）の書式、記載内容を、同時期の南部慶尚道地域の戸籍と比較しつつ分析した（雑誌論文「1852年朝鮮『平安道中和府壬子式年戸籍』初探」）。

第一に、『中和府戸籍』の基本的な構成、戸の編成方法などは同時期の慶尚道地域の戸籍と違いはなく、1675年の五家統事目以降の朝鮮戸籍の範疇に属する。

第二に、記載内容からみると戸主の把握に重点が置かれていた。戸主については職役・姓名・年齢・本貫・四祖がほぼ例外なく記されており、通例の朝鮮戸籍の記載項目を網羅している。それに対し、戸主の妻には祖先情報を欠く例が多く、子・女にはかなりの漏口が予想された。本戸籍は一定数の戸を戸主によって把握するところに主眼を置いており、実際に存在した戸口の実数把握にはさほど強い関心を示していないと解釈できる。

第三に、戸主の職役は幼学が過半を占め、閑良がそれにつき、両者で戸主の9割を超える。通常の身役はわずかしかなかく、慶尚道地域以上に軍役制の解体が進んでいた可能性を示す。ただし、すべての戸主が幼学を称しているわけではなく、身分のないし社会的な階層差が依然残っていたことも予想される。

第四に、戸内に奴婢はほとんどなく、奴婢制の解体傾向が戸籍上にあらわれていた。この点も

慶尚道地域以上に明瞭な特徴である。

『中和府戸籍』はこれまで本格的に分析されたことがなく、以上の論点は朝鮮戸籍史研究、社会史・身分史研究の基礎的な研究成果となるであろう。

(2) 朝鮮北部地域新式戸籍の特徴

雑誌論文「朝鮮新式戸籍関連資料の基礎的研究(4) —国立歴史民俗博物館所蔵 1906年平安南道孟山郡外南面戸籍—」では1896年以降の朝鮮新式戸籍のうち、最近その存在が確認された『平安南道孟山郡外南面戸籍』(1906年、国立歴史民俗博物館所蔵)をとりあげ分析した。この戸籍の特徴としてはつぎの点があげられる。

第一に、『孟山郡外南面戸籍』は新式戸籍として標準的な様式であり、戸口調査規則・戸口調査細則にもとづく戸口調査と戸籍の編籍が1906年のこの地域でも確実に実施されていたことを確認できる。ただし、たとえば本戸籍では同居親属の年齢が記載されていないなど、同じ平安南道内でも記載方法の細部については郡による差異がみられる。具体的な記載方法は各郡の判断・慣行によっていたようである。

本戸籍の記載内容で注意を引くのは、戸数把握率の高さである。多くの新式戸籍の戸口数は、18世紀の戸口記録や1907～1910年の警察力を動員した調査にくらべると相当に少ないのであるが、『孟山郡外南面戸籍』の場合、戸数の変動幅は小さい。これが地域的特性によるのか、1906年という時期によるのかについては今後の調査が必要である。

もう一点注目されるのは職業への「幼学」記載である。本戸籍の戸主はほぼ全員が職業を「農」と記載しているが、そのうち12.5%は「幼学」も併記していた。また、家宅の瓦家率も高く、およそ半数の戸に瓦家が記載されていた。戸主の「幼学」・「儒」記載や瓦家率の高さはほかの北部地域でもしばしばみられるが、中南部地域の新式戸籍ではほとんどの戸主が「農」のみを記し、瓦家はまれである。この差異を身分秩序との関連から考察することも今後の課題となる。

(3) 19世紀末葉朝鮮北部地域の社会編成と社会秩序および家族・親族

雑誌論文「19世紀末葉朝鮮北東部地域の社会秩序—咸鏡道洪原県の儒士・武士・富民—」では、主として戸籍以外の日記・地理誌などを用い、朝鮮北東部、咸鏡道において在地有力者層が形成していた社会秩序の性格を、親族組織などもふくめ検討した。

このころの洪原では学齋が村落に普及し、そこで学び儒教的教養を身につけ科挙応試をめざす儒士・儒生の層が形成されていた。かれらのなかには科挙に及第し、あるいは道薦などにより文官職につく者もあらわれていた。また、齋では郷飲礼がおこなわれるなど、儒教的秩序とでもいべき世界が展開していた。

このような儒士的世界が形成されたのは19世紀に入ってからのものであった。多くの学齋は19世紀の創建であり、武科及第者を出していた武士系の家門から文官職就任者や科挙及第者があらわれるのも19世紀後半の例がめだつ。こうした武士・儒士層のなかには飢饉に際して賑恤につとめ、あるいは公的施設の建築費用を拠出するといった活動に尽力する富民もいた。洪原の富民の経済的基盤は「魚塩の利」であり商業であったが、そうした層の人びとが富を背景に武士・儒士となり、あるいは慈善的活動をつうじて官職など公的な恩賞や社会的な名望を獲得していくという傾向が存在した。洪原の儒士層の閉鎖性・排他性は弱く、武士・儒士・富民が重なりあ

う、比較的柔軟な構造が存在していたように見える。また、そうした柔軟な構造によって、当時の不安定な地方社会の生活基盤が支えられ、社会秩序が維持されていたともいえよう。

家族・親族の側面に注目すると、門中が主催して文会を開くなど、姓と本貫を共有する父系親族集団が有力者層の基礎的な社会集団として機能していたようである。また系譜的にみると、富民・武士・儒士の移行・転換は父系親族集団の交代ではなく、父系親族集団内の世代的な変化としてあらわれていた。

今後はこうした在地有力者層による秩序を紛争・緊張の面からとらえなおす作業が必要とされる。

(4) 朝鮮戸籍からみた北部地域の周縁的社会集団

研究開始時の課題としては明示していなかったが、本研究の成果としてもう一点あげられるのが周縁的社会集団に関するものである。前出『中和府戸籍』には芸能民とみられる「才人」が登場し、史料の少ない19世紀時期の才人に関する貴重な情報を提供する。また、平安道・咸鏡道地域では19世紀末の新式戸籍時期に一般戸籍とは別に僧屠籍という、僧と屠漢を収録した戸籍が作成されていたことがわかっているが、僧屠籍自体はみつかっていなかった。雑誌論文「朝鮮新式戸籍関連資料の基礎的検討(3)―黄海道鳳山郡僧屠戸籍冊―」では、近年存在の確認された、平安道に隣接する黄海道鳳山郡の僧屠籍を分析し、僧と屠漢の社会編成のありようを検討した。記載様式において僧・屠漢は一般戸と異なっており、身分制解体期における国家の社会編成の特質を示す史料として注目された。

このほかに図書『戸籍からみた朝鮮の周縁 17～19世紀の社会変動と僧・白丁』では17世紀から19世紀にかけての朝鮮社会の変動を周縁的社会集団に注目して分析した。本研究課題とかわる主要な論点をあげると、①17世紀後半の五家作統制実施時期の戸籍編成のありかたは、僧・柳器匠・皮匠といった集団を含め良賤制的な把握を基本にしていたこと、②18世紀後半以降、良賤制的把握が崩れていくと同時に僧・柳器匠・皮匠など特定の集団が戸籍上で一般戸と明確に区別される傾向が現れること、③19世紀末の新式戸籍では良賤制(奴婢制)の廃止にともない民の一元的把握がめざされる一方で僧と屠漢は一般戸と異なる別種の戸籍に登載されたこと、④咸鏡道北部(関北)地域での屠牛慣行はほかとは異なっており、屠牛専門集団の不在を含め独自の性格をもっていたことなどを論じた。戸籍による社会編成を検討した基礎的研究であり、今後、北部地域に即した分析を深化させる基盤となろう。

以上の研究成果をあらためてまとめるならば、19世紀から20世紀初の朝鮮北部地域では南部と共通する変化のみならず、北部特有の変化がみられることを確認でき、これは今後の朝鮮戸籍史研究の基礎となる成果である。また、そうした変化に対応した社会秩序の一端を明らかにできたことも重要な成果であるといえる。今後、対象とした時期以降、1910年の併合に至る社会変動を、政治史とは異なる視点から解明していくことが大きな課題となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 山内民博	4. 巻 25
2. 論文標題 19世紀末葉朝鮮北東部地域の社会秩序：咸鏡道洪原県の儒士・武士・富民	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環日本海研究年報	6. 最初と最後の頁 32 - 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山内民博	4. 巻 16
2. 論文標題 1852年朝鮮『平安道中和府壬子式年戸籍』初探	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 資料学研究	6. 最初と最後の頁 16～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山内民博	4. 巻 15
2. 論文標題 朝鮮新式戸籍関連資料の基礎的検討（3） 黄海道鳳山郡僧屠戸籍冊	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 資料学研究	6. 最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山内民博	4. 巻 27
2. 論文標題 朝鮮新式戸籍関連資料の基礎的研究（4） 国立歴史民俗博物館所蔵1906年平安南道孟山郡外南面戸籍	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 環日本海研究年報	6. 最初と最後の頁 103-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 山内民博
2. 発表標題 日本国内所在韓国新式戸籍に関する調査・研究の現状と新出戸籍資料
3. 学会等名 全北大学校人文力量強化事業推進団国際学術大会「古文書と記録文化」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山内民博
2. 発表標題 日本所在1906年『黄海道鳳山郡僧屠戸籍冊』をめぐって
3. 学会等名 新潟史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山内民博
2. 発表標題 20世紀初ソウルの懸房と[ハン]人
3. 学会等名 朝鮮衡平運動研究会日韓研究会（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山内民博	4. 発行年 2021年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 276
3. 書名 戸籍からみた朝鮮の周縁 : 17-19世紀の社会変動と僧・白丁	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------